

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	近代中国における女性雑誌の歴史
Author(s)	谷, 雲星
Citation	HABITUS , 27 : 192 - 212
Issue Date	2023-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/53735
URL	https://doi.org/10.15027/53735
Right	
Relation	



近代中国における女性雑誌の歴史

谷 雲 星

(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期 2 年)

はじめに

清朝末期から辛亥革命、日中戦争にかけて、近代中国においては、様々な女性解放運動が盛んであった。それらの解放運動の中で、新聞や雑誌などのマスメディアは大きな役割を担っており、政治の宣伝道具や知識人の言論空間として発展してきた。したがって、本稿では、筆者は女性雑誌に注目し、近代中国の女性雑誌史に関する考察を展開する予定である。まずは、近代中国の女性雑誌に関する先行研究を以下の 4 種類にまとめた。

(1) 時系列に従って行われた研究

例えば、『中国近現代婦女報刊通覧』(1990)においては、辛亥革命時期(1898-1918)、五四愛国運動時期(1919-1921.6)、共産党成立時期(1921.7-1927.7)、土地革命時期(1927.8-1937.6)と日中戦争時期(1937.7-1945.8)という5つの時期に分けられて女性雑誌の歴史について論じられている¹⁾。また、『中国婦女報刊史研究』(2012)は辛亥革命時期(1898-1912)、中華民国初期(1912-1917)、五四愛国運動時期(1917-1921)、共産党成立後(1921-1937)と日中戦争時期(1937-1945)に分けられて述べられている²⁾。

(2) 特定の地域における研究

研究者らは特定の地域における女性雑誌史に注目し、その地域の特徴を明らかにした。例えば、『北京婦女報刊考』(1905-1949)において、作者たちは北京

における 110 種の婦女雑誌や新聞などに基づき、それらの原文を引用して雑誌の性格などを簡潔に論じている³⁾。趙蓓紅は博士論文「近現代上海婦女報刊史」（1898-1949）において、清朝末期から中華人民共和国建国までの、上海における代表的な女性雑誌を取り上げ、それらの雑誌の特徴と女性雑誌の発展史について考察した⁴⁾。

（3）特定の時期における研究

研究者らは特定の時期における女性雑誌を研究し、その時期の特徴を探究した。例として、中国語論文「性別与職業：民国時期女記者的身份認同（1920-1940）（性別と職業—中華民国時期の女性記者に対する地位の承認（1920-1940）」⁵⁾、「辛亥革命前後的女子報刊（辛亥革命前後の女子報刊）」⁶⁾などが挙げられる。

（4）特定の雑誌に関する研究

研究者らは特定の女性雑誌に注目し、その雑誌の内容を分析した上で、雑誌の性格や、編集者、作者の思想などを論究した。現在、こうした研究論文は相当数がある。例えば、中国語論文「『婦女雑誌』研究」⁷⁾、日本語論文「つながる女性たち：戦時期『上海婦女』を中心に」⁸⁾などが挙げられる。

以上の通り、現代の研究者たちは様々な研究方法を用いて近代中国の女性雑誌について論じている。そのうち、雑誌史の全貌を総合的に考察する際に、特定の地域や時期などに焦点を当てる研究方法と比べると、時系列に沿った研究方法のほうが最も効率的な方法だと考えられる。したがって、本稿では、近代中国（1898-1945）における女性雑誌の特徴と全体像を明らかにすることをめざすため、特定の地域・時期・雑誌に限らず、筆者は時系列に従った考察を進めていく。その時期区分については、上記の 5 区分（『中国近現代婦女報刊通覧』）と（『中国婦女報刊史研究』）を比較考量した場合、本研究では、大きく 4 区分でみていくことを採用する。具体的には、以下において、4つの時期（①

辛亥革命時期 1898-1917、②五四愛国運動時期 1917-1921、③共産党成立後 1921-1937、④日中戦争時期 1937-1945)に分け、それぞれの時期における具体的な女性雑誌（特に先行研究の中で詳しく論じられない女性雑誌）の原文を取り上げて考察する予定である。

1. 辛亥革命時期（1898-1917）

清朝末期、康有為や梁啓超などの維新派知識人たちは天賦人權論などの西洋思想を中国に導入し、婦女解放を提唱しはじめた。1898年7月に、中国女学会（女性団体）と中国女学堂（中国女学会が設立した女子学校）により、最初の女性向けの新聞『女学報』が創刊された。その『女学報』の中では、主に男女平等や女子教育などについて論じられている⁹⁾。

戊戌の変法後、女性の教育レベルが高くなったため、女性知識人が台頭し、彼女たちは婦女解放運動や、新聞、雑誌の創刊などの活動に身を投じていた。その上、当時の男性知識人の協力を得て、様々な女性雑誌が刊行された。例えば、『女子世界』（丁初我 1904.1）、『中国女報』（秋瑾 1907.1）、『神州女報』（陳志群 1907.11）などが挙げられる。

具体的な雑誌内容を検討しよう。『女子世界』（1904）の「発刊詞」において、「女子とは、国民の母である。中国を革新するなら、まず女子を革新し、中国を強めるなら、まず女子を強める。中国人を教育するなら、まず女子を教育し、中国を救うなら、まず女子を救うべきだ」¹⁰⁾とある。また、『中国女報』（1907）第1期の目次によると、編集者は演壇、訳文、伝記、小説、文学、新聞など、多様なジャンルから女子教育と女性団体の重要性を強調した¹¹⁾。『神州女報』（1907）は有名な女性革命者秋瑾の記念刊だったが、秋瑾の著作や文章のみならず、社会の婦女問題に関する文章も掲載された。例えば、「女子の家庭革命論」（『神州女報』第1期）において、著者は「今までの封建思想を潰すことで、女性たちを解放する可能性がある」と主張した¹²⁾。

戊戌の変法から辛亥革命直前まで、多くの男女知識人たちが女性雑誌を創刊したため、女性雑誌の数は急速に増加した。それらの雑誌編集者たちは男女平等や女子教育の必要性を提唱し、封建制度から民族を解放するための解放運動をも呼びかけていた¹³⁾。

1912年1月に中華民国が成立し、女性の参政権に関する運動が興ったため、民国初期の女性雑誌は主に女性の参政権をめぐる論じられるものであった。例えば、1911年6月に発刊された『婦女時報』(荻葆賢 1911.6)の主旨は、「女子の学問を提唱し、女性の知識のレベルの向上を促進する」¹⁴⁾ことであったが、辛亥革命が始まった後、編集者は女性の参政権や女性の企業への就職についてとりわけ強調し、女性の権利は、従来の学問的・教養的なものに加え、政治的・社会的なものへと力点が移されていった¹⁵⁾。実際、辛亥革命後、多くの女性雑誌は女子団体の宣伝道具として使われ、参政権運動への呼びかけなどが雑誌内容の中心となった¹⁶⁾。

その後、1913年に袁世凱は古代の独裁者を模し、古代「皇帝」になり、全国を封建社会に復古し、女性の封建倫理思想(貞操や男尊女卑など)を改めて提唱した。そのため、女性の権利を擁護し、女性にかかわる話題を提供した女性雑誌の数は大幅に減少した。それに対して、この「復古時期」の政策に応じる形で誕生した一部の女性雑誌は、女性への封建礼儀や道德などを読者たちに押し広めた¹⁷⁾。例えば、『女子世界』(1914)においては、「鄭烈女伝」(第1期)、「劉烈女伝」(第1期)など封建思想に生きる烈女に関する文章が取り上げられた。そこでは、女子が自分の貞操を守り、死去した夫のために殉死するという、男性への滅私・献身的な女性像が強調された。また、同時期の『中華婦女界』(1915)の編集者は良妻賢母主義を主張し、「婦徳」(婦女の徳目)を取り上げ、一人の「女」であることよりも、夫に従う「婦」として生きる方が重要だと指摘した¹⁸⁾。

以上、辛亥革命時期(1898-1917)の女性雑誌の発展を考察した。この時期の

全体的な雑誌の特徴について、中国研究者宋素紅は以下のようにまとめた。

- ① 数が多く、範囲が広いこと。
- ② 女性知識人が主催した雑誌の数が多いこと。
- ③ 雑誌の内容は相対的に幅広くて、中身があること。¹⁹⁾

上記の3点以外には、辛亥革命前から続く女子教育の重視や、男女平等や女性解放といった女性の地位向上が提唱されていたことなども特徴として挙げられる。しかし、この時期、女性雑誌は「無（存在しなかった時代）」から「有（広く普及する時代）」へと大きく変化したが、女性の解放自体は実際にはまだ実現できていなかった。したがって、この女性解放の任務は後の五四愛国運動の知識人たちに引き継がれていくことになる。

2. 五四愛国運動時期（1917-1921）

辛亥革命が失敗した後、女性運動もしばらく展開の歩みが止まった。しかし、1915年9月に創刊された総合雑誌『新青年』はついにこの沈黙を破った。1917年2月に、非女性雑誌である『新青年』の編集長陳独秀は「新青年・女子問題」欄を設け、女性解放を強力に呼びかけた。例えば、「孔子の道と現代生活」（『新青年』第2巻第4号1916）において、陳独秀は儒教の男尊女卑の古い観念を批判し、女性参政を實行すること、男女交際を公にすること、大家族から核家族へ移行すること、寡婦の再婚を許すことなど、様々な現代的な女性解放論を提唱した²⁰⁾。彼の呼びかけに応え、続々と当時の有名な知識人たち（胡適、魯迅など）は女性問題について議論を繰り広げた。例えば、「女子問題」（陶孟和²¹⁾、「イプセン主義（個性尊重の立場から新時代の女性の生き方を提唱）」（胡適²²⁾、「私の節烈観（強調すべき正しい道德観）」（魯迅²³⁾などの文章が『新青年』で発表された。すなわち、『新青年』は女性のために声を上げた雑誌であり、当

時の女性解放を促進したと思われる²⁴⁾。

『新青年』における「女子問題」欄の誕生を皮切りに、当時の知識人たちは再び女性運動に参加し、女性の参政権や人権などの重要性を呼びかけ、女性雑誌の刊行を進め、女子問題への議論を非常に活発に展開した。この時期（1917～1921）に、『女界鍾』（1919）、『新婦女』（1920.1）、『婦女評論』（1920.5）など、合計 28 種の女性雑誌が発行された²⁵⁾。

そのうち、とりわけ、当時、影響力もあり、新しい女たちの思想解放と男性と対等の生き方に焦点を当てた雑誌『新婦女』（1920）について内容を紹介してみたい²⁶⁾。『新婦女』（1920）は「新婦女宣言」（第 1 巻第 1 期）において、この『新婦女』を刊行する目的を、「社会状況を改善し、将来男性と一緒に重大な社会責任を負うために婦女たちに徹底的な覚悟をさせること」²⁷⁾と明記した。さらに、「新婦女宣言」（第 1 巻第 1 期）においては、雑誌の主旨について以下の 4 点が挙げられている。

- ① 現代社会における新婦女を妨げる思想を排除すること。
- ② 新婦女の正しい道を探究すること。
- ③ 参考として欧米の婦女たちの新しい思想を紹介すること。
- ④ 現代社会における婦女たちの生活状況を調べ、改善の準備をすること²⁸⁾。

その他、『新婦女』（1920）においては、「自由恋愛を前提とする結婚は、第三者と関係なく、お金などとも関係ない」「貞操を排除することではなく、男女（夫婦 2 人）とも貞操を守るべきだ」²⁹⁾というような発言があり、当時の知識人たちにとって非常に進歩的な女性雑誌であったといえる。

また、この五四愛国運動時期に最も有名な女性雑誌として、名前が挙げられるのは 1915 年 1 月に創刊された『婦女雑誌』である（刊行数の多さと発行所の広がりとは当時最大）。本誌では、1919 年 11 月に、良妻賢母を主張して以降、

さらに内容を革新し、様々な女子問題（性道徳、貞操問題、自由恋愛、経済的な独立など）を取り上げるようになった³⁰⁾。さらに、1921年1月に、編集長が当時の有名な男性知識人章錫琛³¹⁾に変更されたことで、雑誌の性格も大きく変わった。王政（Wang Zheng 1999）によると、章錫琛は周作人や魯迅などの知識人を誘って編集者を担当させたほか、自分で欧米や日本のフェミニズム著作を訳して紹介し、フェミニズム（エレン・ケイなど）や性科学に関する理論的な文章を掲載した。章錫琛のエレン・ケイ思想の受容については、楊妍（2016）³²⁾の研究が詳しいので参照してほしい。

章錫琛を編集長とする『婦女雑誌』は、様々な恋愛・結婚をめぐる問題をも話題の対象にした。具体的には、「離婚問題号」「産児制限号」「婚姻号」などと称して、每期毎に、注目すべき問題として、一つずつ焦点化し取り上げていった。彼が考える婦女解放論と恋愛の在り方に関する主張を一つ紹介しよう。

中国人は女性を男性の所有物とし、子どもを家長の所有物とし、彼女らが個人の人格をもち、自由な意志を持っていることを認めない。社会主義を主張する人は、私有財産制度が打破されさえすれば問題はなくなると考えている。これは確かに男性が女性を所有し、家長が子どもを所有する基礎を打ち壊すことができる。しかし私は、女性が男性に対して、子どもが家長であって、このレベルまでやるには、恋愛の自由を主張することしかないと思っている。³³⁾

要するに、章錫琛は経済的・政治的な解放のみならず、女性の人格を認める社会が実現するためには、従来の封建的な枠を超え、恋愛の自由がまずもって保障されねばならないと考えたのである。とりわけ、この「恋愛の自由」に対し、彼はこの「自由」とは、「異性に対して干渉のない自由」であり、「恋愛関係が成立してから恋愛が破れるまで必ず夫婦でありつづけ、第三者と恋愛関係になることができず、家庭を維持し、生まれた子どもに対してともに責任を負

わなければならない」³⁴⁾と論じた。つまり、ここでの主張は、恋愛に関する全てのことが自由であるということの意味しているわけではなく、従来の封建的な父系優位の判断を変え、夫婦であるかぎり、ともに家庭の維持に努め、子どもへの責任をともに引き受けるという夫婦対等の義務と自由が主張されたのである。

以上見てきた論者たちによる進歩的な主張によって、この時期の『婦女雑誌』(1915)は高く評価され、刊行数は最初の2千部から1万部以上に至り、発行所は全国42都市まで拡大し、当時の女性雑誌の「リーダー」と称された³⁵⁾。しかし1924年から、国民党と共産党が婦女運動を促進し、婦女解放と民族の解放をつなげた政策の下で、「性解放」「恋愛の自由」といった革新的な論調は猛烈に批判されるようになった。王政(Wang Zheng 1999)によると、このような批判の後、1925年9月に、『婦女雑誌』は編集長が変わり、恋愛、婚姻、離婚、性などの議論やフェミニズム著作の訳文などの記載はなくなり、フェミニズムに関する発言自体も消えてしまい、その代わりに芸術や健康知識などの内容が掲載されるようになった³⁶⁾。

この五四愛国運動時期を振り返ると、婦女解放の思想が当時の社会に浸透したため、より多くの人たちが女性問題に関心を持ち、多くの女性雑誌が女性問題を重視するようになり、様々な女性解放の方法が探求されたことが分かる。さらに、自由と民主の理念も広がり、規制も入ったが、この時期はフェミニズムや、女性問題に国民が最も注目した時期だったともいえる。その後、共産党の成立や戦争のため、時代は、女性の解放より、民族の解放の方を重視していくようになった。この詳しい内容については次項で考察する。

3. 共産党成立後(1921-1937)

中国共産党は1921年7月に成立し、マルクス主義フェミニズム思想³⁷⁾の下で、中国婦女の解放運動を非常に重視し、婦女の解放をプロレタリアートと全

国民の解放に向けた一目標として、中国プロレタリアート革命運動と民主革命運動に組み入れた³⁸⁾。そして、共産党は大量の婦女団体を組織し、婦女雑誌を創刊し、婦女たちを動かして革命運動に参加させた。当時、創刊された雑誌には、例えば、『婦女評論』(1921.8)、『婦女声』(1921.12)、『婦女日報』(1924.1)などが挙げられる。まず、『中国近現代婦女報刊通覧』(1990)を参照し、それらの雑誌の共通点について整理してみよう。

- ① 婦女を縛る様々な社会現象や問題を明らかにすること。
- ② 婦女が圧迫された根本的な原因を明らかにし、婦女解放の道を探し、マルクス主義フェミニズムの理論を広めること。
- ③ 婦女団体の設立、宣言、スローガン、重要な活動などを伝えること。
- ④ ソ連や欧米などの世界婦女運動の状況を紹介すること。³⁹⁾

さらに、同書では、雑誌の主旨が以下の5点にまとめられるとされる。

- ① 様々な方法で中国共産党の婦女運動に関する方針を広めること。
- ② (一部の雑誌) 女性運動の基礎である女性労働者を強調し、彼女らのストライキ闘争を応援し、女性労働者の権利を呼びかけること。
- ③ 一般の婦女運動も重視し、一般的な婦女の権利などを求めること。
- ④ 婦女界の連盟の形成を提唱すること。
- ⑤ 婦女たちに向けて自分の力で自分を解放しないといけないと強調すること。⁴⁰⁾

次に、公的な視点を含め影響力のあった『婦女評論』(1921)の内容を見てみよう。『婦女評論』(1921)は中国共産党が主催した雑誌であり、『民国日報』の特別版として発刊(1921年8月)され、とりわけ婦女問題を取り上げた。本誌は、1923年8月に『現代婦女』と併合されて『婦女週報』になった。ただ、管

見のかぎりでは、日中において、『婦女評論』（1921）に関する論文、特に女性解放思想についての研究は極めて少ない⁴¹⁾。それゆえ、本論文ではこの点を補うべく、『婦女評論』（1921）の女性解放論について、以下、考察を進めてみたい。

『婦女評論』（1921）の発刊号において、雑誌の主旨は以下の5点にまとめられている。

① 婦女問題は単に婦女に関わることではなく、婦女が迫害されたのは婦女の一面的な損害でもない。あらゆる人間団体（社会）において、ある階級の人たちが抑圧されたため、その団体の成長に知らず知らずのうちに多くの阻害をもたらした。したがって、人間平等論（ヒューマニズム）と母性尊敬論以外に、社会進化論こそが婦女解放の根本的な理論である。

② 数千年に渡って迫害されてきた婦女は、知識、道徳、能力などが男性より低いのは当然のことだろう。だから、「婦女のレベルなら解放の資格がない」という言論に反対する。私たちは「婦女の教育問題」を婦女問題の「先決問題」と見なす言論には、賛成できず、むしろそれは婦女問題の真の意味（あらゆる個人・夫婦・家庭・社会・政治・経済面での男女格差の解消と自由の保障という根本問題）を不問にすることにつながる。

③ 私たちは、とりわけ、一切の問題の根源は経済問題であると考えている。私たちは婦女たちが絶対的な自由労働権を所有するべきであり、すべての職業を婦女に開放し、男子と同様の待遇をとるべきと主張する。

④ 現代社会において、自由結婚と自由離婚、両方とも重要であると私たちは主張する。

⑤ 中国の大家族制度に反対し、家庭の簡略化（大家族から核家族へ）を主張する。ただし、それは現在の段階での手段に過ぎない。私たちの根本的な目的は家庭を排除することである。⁴²⁾

上記の雑誌の主旨によると、『婦女評論』（1921）では、家庭制度への批判、社会進化論、経済問題、自由労働権、自由離婚などの方面から女性解放について議論が展開されていることが分かる。具体的に見れば、経済問題については、「女子はいかに経済的に独立できるか」（『婦女評論』第3期 1921）という文章において、「女性が経済的に独立できない原因は私有財産制度であるため、独立を求めるなら私有制を壊さないといけない」とされ、この点で、「解放を目指す女性たちは、男性労働者と協力し、世界のプロレタリア男性労働者と連携してほしい」と述べられている⁴³⁾。「女子職業を話す」（『婦女評論』第65期 1922）という記事では、女性が職業上の自由を確保するためには、「私たちは自分の力で努力するしかない。男に頼らないでほしい。ほかの女性に対してお互い助け合う心を持ちなさい」⁴⁴⁾という文章が見られる。また、自由離婚については、「離婚に関する雑談」（『婦女評論』第36期 1922）で、「社会の解放レベルが高いほど離婚の件数は多い」「女性が経済的に独立することができれば、離婚できないことはない」と論じられ、女性の経済独立と社会の自由化が離婚の条件と見なされている⁴⁵⁾。

加えて、本雑誌『婦女評論』（1921）には外国語作品の数がかなり多く、それらの論評を支持しその影響を受けていることも特徴といえる。例えば日本の社会主義者堺利彦⁴⁶⁾、婦女問題研究者山川菊栄（1890-1980）などの作品が訳載され、彼らの女性思想が紹介されている。そのうち、山川菊栄の記述について紹介してみよう。婦女思想について著した彼女の作品としては、「社会主義的な婦女観」（『婦女評論』第10-11期 1921年10月）、「婦女労働者の解放」（『婦女評論』第21期 1921年12月）、「新しいロシアの建設と婦女」（『婦女評論』第67-68期 1922年11月）、「1922年末の国際婦女日」（『婦女評論』第91期 1923年5月）が中国語訳されて掲載されている。山川による婦女観の主張をよく表す最初の2つの論説の内容を取り上げてみよう。「社会主義的な婦女観」（『婦女評論』第11期 1921年10月）においては、婦女問題を解決する方法とは、経

済的な独立を求めることであり、さらに真の経済的な独立を求めるなら、社会主義運動に参加するしかないと主張されている⁴⁷⁾。「婦女労働者の解放」においては、婦女の悲惨な運命を改善するために、「最も大事なことは、労働者たちの団結である。工場、商店、事務所、学校などで働いている人たちは、相応しく協力できる団体があれば、いち早く参加するべきだ。もしそのような団体がなかったら、3人でも5人でも小さな団体を作り、忠実で熱心な態度を持ち、団体の発展に力を入れてほしい⁴⁸⁾」という主張が取り上げられている。

他には、こうした社会主義的な婦女解放論以外に恋愛を広い視点で考える記事も見出すことができる。例えばエレン・ケイの作品（恋愛至上論）がそれに当たる。「恋愛の自由」（『婦女評論』第58期・第60期1922年9月）においては、「早婚より晩婚のほうがいい」「結婚は個人のことのみならず、人種の使命とも言える」などの言論が紹介された⁴⁹⁾。ただし、このような論調はまれで、共産党が主催した『婦女評論』（1921）にとっては、資本主義的経済構造の打破を軸に改革を説く社会主義的なフェミニズム思想のほうが雑誌の主流的な思想といえるだろう。

1923年8月には、この共産党主体の『婦女評論』と国民党の『現代婦女』とが併合され、『婦女週報』（1923）になり、1926年1月まで105期が刊行された⁵⁰⁾。その後、1927年に国共合作が崩壊し、内戦に突入する。1927年から、国民党は良妻賢母を提唱し、その主張を、刊行した『中央日報』の特別欄『婦女週刊』（1935）、『婦女と家庭』（1937）などで展開した。それに対し、共産党は良妻賢母を批判する立場を取り、その見方は、『婦女園地』（1934）、『婦女生活』（1935）などで強調された。また1931年満州事変後には、『女声』（1932）、『新婦女』（1933）、『北平婦女』（1936）など、抗日運動に注目する女性雑誌も次々と現れた。そのうち、雑誌『女声』（1932）については別稿で詳しく説明する。

4. 日中戦争時期（1937-1945）

1937年に日中戦争が始まったため、国民党と共産党はしばらく内戦を休止し、協力して抗日するようになった。『女性媒介－歴史と伝統』（『女性媒介：歴史と伝統』2006）の統計によると、1937年から1945年にかけて、合計130種以上の女性雑誌が発行された⁵¹⁾。例えば、共産党が主催した雑誌には、『婦声』（1938.3）、『婦女之路』（1940.5）、『上海婦女』（1938.4）、『中国婦女』（1939.6）があり、国民党が刊行した雑誌としては『婦女知識』（1937）、『婦女正誼』（1938.12）、『婦女月刊』（1941.9）、親日派の知識人や南京政府が発行した『婦女世界』（1940）、『女声』（1942）などがあげられる。

この時期に発行された多くの女性雑誌の特徴について、研究者劉人鋒は以下のようにまとめている。

- ① 国家の解放と婦女の解放とのつながりを明らかにし、婦女たちを動かして救国運動に参加させ、婦女たちが国家の解放運動に身を投じた情報を報道したこと。
- ② 戦時下の婦女の仕事に関する経験を交流し、婦女自身の生活状況などを反映したこと。
- ③ 「家庭に帰る」言論を批判し、婦女の就職、婦女参政などを議論し、婦女の権利を求めたこと⁵²⁾。

それでは、以下、共産党を代表する『婦声』（1938）、国民党を代表する『婦女月刊』（1941）、親日派が刊行する『婦女世界』（1940）の順に、それぞれの具体的な雑誌内容について見てみよう。

まず、『婦声』（第2.3期1939）の目次によると、雑誌の内容は主に戦争の状況や、侵略者への批判、愛国運動への呼びかけについて展開されていることが分かる。（表1に見る）

表1 『婦声』第2・3期目次リスト

日本語	中国語
汪兆銘を逮捕する政府の明白な命令を支持する	擁護国府明令通緝汪精衛
漢奸や売国奴を泳がせない	漢奸国賊不客逍遥法外
抗戦後の中国	抗戦以后的中国
侵略者の政策を壊す	粉碎侵略者新政策
二年間抗戦した後の国内政治について	抗戦两年的国内政治
抗戦以来の中国財政	抗戦以来的中国財政
江西におけるこの二年間の婦女運動	两年来的江西婦运
ファシズム下での婦女と反ファシズム戦争中の婦女	法西斯統一治下的婦女与反法西斯戰爭中的婦女
戦時下日本婦女の生活	戦時日本婦女的生活
立ち上がれ、全国の姉妹たち	起来全国姉妹们
婦女工作者へ（続）	給婦女工作者（続）
農村の教育者を動かして婦女運動を助ける	發動鄉村教育者帮助農村婦女運動
江南の遊撃隊	在江西遊撃隊
惨めな遺跡から高安を話す	惨痛遺跡話高安
憤り	憤恨
戦時下の中学生：漢文の授業を受ける際の態度	上文言文課的態度
卒業した後どうするか	卒業後怎么办
婦女を動かして抗戦運動に参加させるなら、 まずは彼女らの生活を改善すべきだ	要發動广大婦女参加抗戦工作必先改善他们 生活

上の表からわかるように、『婦声』（1938）は女性雑誌だったが、婦女自身の解放に関する文章が少なく（ほぼない）、戦争や国家解放が注目され、雑誌名「婦声」とは「婦女の声」ではなく、「婦女を抗日運動へと動かす声」といえるだろう。

それに対して、国民党発刊の『婦女月刊』（1941）においては、戦争や婦女を動員する発言もあるが、性や生育の知識、恋愛や離婚、子ども教育など、様々な内容も掲載されている。例えば、「児童教育とはなにか」（『婦女月刊』第1巻第5期）においては、子どもの個性が強調され、「今日から、私たちは子どものことを真剣に認識するべきだ。私たちは子どもにひどい体罰をするのではなく、逆に子どもの個性を発展させるべきだ。子どもを褒めるべきであり、みんなの前で子どもを皮肉ったり、みんなに子どもの過ちを知らせたりしないほしい」「子どもたちは私たちと同様に、自分なりの性格、プライドを持っている人間である」、という子どもへの教育上の対応に関する記述が見出せる⁵³⁾。

親日派が刊行した『婦女世界』（1940）においては、婦女生活、知識や婚姻問題、子どもの教育などについて論じられる一方、日中友好協力の文章も発表された。とりわけ、本誌は、子ども教育に関する文章の比重の大きいことが特徴とみられる。たとえば、「若い母親たちへ」で書かれた記事のように、出産後の母親と赤ちゃんへの注意点など、当時、母になった女性たちへの育児アドバイスが掲載されていた⁵⁴⁾。また、「児童の道德問題」では、「道德教育の目的」達成の前提として、その道德について、「児童が知ることができ、生活に活かすことができ、より善くなりうる」ことが強調され、その具体的な道德内容については、「清潔、礼儀正しさ、誠実、勇気、節約、正義」などの徳目が挙げられた⁵⁵⁾。その他、この親日派雑誌では、婦女解放の意義について、「五四運動と婦女解放」（『婦女世界』第56期 1945）においては、「婦女は平等な権利を持つため男性と戦って英雄になるのではなく、婦女への偏見や差別などに反対し、合理的で平等な待遇を求めることである」⁵⁶⁾という示唆がなされた。

一方、この『婦女世界』（1940）においては、日中友好協力に関する文章も発表されている。例えば、「どのように新しい時代の婦女になるか」（『婦女世界』第2巻第5期1941）においては、「盧溝橋事変（北支事変）をきっかけに、汪精衛先生が都を移したことに伴い、中国は新しい段階に入った。重慶政府（国民党政府）の抗日軍陣が瓦解の一途を辿ることによって平和が訪れる日はまもなく来ると期待できる。さらに、政府間で日中基本条約を締結されたことで、中国本国では堅固で長期的な東亜平和の基礎が築かれた。現在、私たちは偉大な新時代において、平和と幸福の曙光が全ての平和を愛する人たちの目に見え始めた。私たちは喜ぶべきだ」⁵⁷⁾と述べられている。

以上見てきたように、日中戦争時期の共産党誌『婦声』（1938）、国民党誌『婦女月刊』（1941）、親日派の雑誌『婦女世界』（1940）は政治的立場が異なり、記述内容もそれぞれの特徴が明らかに示された。それらの特徴を略述してみよう。

- ① 共産党や愛国者による女性雑誌は国家解放に着目し、婦女を民族の解放運動に動員させることを目指している。
- ② 国民党による女性雑誌は民族の解放を重視すると同時に、女性の解放、子どもの教育などにも注目している。
- ③ 親日派の女性雑誌は女性自身の解放や、子ども教育や男女のあるべき関係について論じ、日中協力などの政策をも宣伝している。

おわりに

以上、本稿では辛亥革命後から日中戦争までの女性雑誌の歴史について考察し、それぞれの時期における女性雑誌の特徴を明らかにした。それらの女性雑誌の研究を通して、当時の女性解放思想についてより深く理解できたと考えられる。

註

- 1) 田景昆、鄭曉燕編『中国近現代婦女報刊通覽』海洋出版社 1990年12月
- 2) 北京市婦女聯合会編『北京婦女報刊考』（1905-1949）光明日報出版社 1990年9月
- 3) 趙蓓紅「近現代上海婦女報刊史」（1898-1949）華東師範大学博士論文 2019年5月
- 4) 馮劍俠「性別与職業：民国時期女記者的身份認同（1920-1940）」復旦大学博士論文 2013年5月
- 5) 馮劍俠「性別与職業：民国時期女記者的身份認同（1920-1940）」復旦大学博士論文 2013年5月
- 6) 范蘊涵「『婦女雜誌』研究」山東師範大学修士論文 2009年4月
- 7) 須藤 瑞代「つながる女性たち：戦時期『上海婦女』を中心に」アジア遊学（267）pp.78-92、2022年3月
- 8) 宋素紅『女性媒介：歴史与伝統』中国伝媒大学出版社 2006年8月 p.21
- 9) 「発刊詞」『女子世界』第1期 1904年1月
- 10) 秋瑾『中国女報』第1期 1907年1月
- 11) 亜蘆「女子家庭革命論」『神州女報』第1巻第1号 1907年11月
- 12) 宋素紅『女性媒介：歴史与伝統』中国伝媒大学出版社 2006年8月 pp.41-42
- 13) 「発刊辞」『婦女時報』第1期 1911年6月
- 14) 田景昆、鄭曉燕編『中国近現代婦女報刊通覽』海洋出版社 1990年12月 pp.15-16
- 15) 例えば『中華女報』（1912.9）『女子白話旬報』（1912.10）などの女性雑誌が挙げられる。
- 16) 宋素紅『女性媒介：歴史与伝統』中国伝媒大学出版社 2006年8月 p.48
- 17) 「婦徳」『中華婦女界』第1巻第1期 1915年

- 18) 宋素紅『女性媒介：歴史与伝統』中国伝媒大学出版社 2006年8月 pp.51-54
- 19) 陳独秀「孔子之道与現代生活」『新青年』第2巻第4号 1916年12月
- 20) 陶孟和「女子問題」『新青年』第4巻第1号 1918年1月
- 21) 胡適「易卜生主義」『新青年』第4巻第6号 1918年6月
- 22) 魯迅（唐俟）「我之節烈觀」『新青年』第5巻第2号上 1918年8月
- 23) 劉人鋒『中国婦女報刊史研究』中国社会科学出版社 2012年5月 p.175
- 24) 具体的な表は「劉人鋒『中国婦女報刊史研究』中国社会科学出版社 2012年5月 pp.202-204」に参照してほしい。
- 25) 『新婦女』における婦女問題に関する論文は劉人鋒「『新婦女』与“新婦女”」『中華女子学院学報』第21巻第3期 2009年6月が挙げられる。
- 26) 「新婦女宣言」『新婦女』第1巻第1期 1920年1月1日
- 27) 同上
- 28) 陸秋心「婚姻問題的三個時期」『新婦女』第2巻第2号 1920年4月15日
- 29) Wang Zheng , *Women in the Chinese enlightenment : oral and textual histories* ,University of California Press 1999, p .68
- 30) 章錫琛（1889～1969）浙江省紹興出身。1912年に商務印書館に入り、『東方雜誌』の日本語翻訳に従事した。1921年1月に『婦女雜誌』の編集長となり、誌面を革新し、雑誌の性格を大きく転換させた。
- 31) 楊妍「1920年代における章錫琛のエレン・ケイ思想の受容について:平塚らいてうとの比較を中心に」『国際文化研究 22』31-44、2016年3月
- 32) 恋愛問題的討論『婦女雜誌』第8期9号 1922年9月、訳文は白水紀子「『婦女雜誌』における新性道徳論：エレン・ケイを中心に」『横浜国立大学人文紀要』pp.1-19によるも

のである。

33) 章錫琛「読鳳子女士和 YD 先生的議論」『婦女雜誌』第 9 卷 2 号 1923 年 2 月

34) 宋素紅『女性媒介：歴史与伝統』中国伝媒大学出版社 2006 年 8 月 pp.110-111

35) Wangzheng , Women in the Chinese enlightenment : oral and textual histories ,University of California Press 1999, p .91

36) マルクス主義フェミニズムとは、従来のマルクス主義が研究の対象にしなかった男女の性差を視野に入れ、資本主義や私有財産制において女性（女性労働者）がいかに抑圧されているかについて研究し、女性労働者の解放を目指すフェミニズムの一派をさす。

37) 田景昆、鄭曉燕編『中国近現代婦女報刊通覧』海洋出版社 1990 年 12 月 p.39

38) 同上書、p.40

39) 田景昆、鄭曉燕編『中国近現代婦女報刊通覧』海洋出版社 1990 年 12 月 pp.40-41

40) 日本側では、桑島 由美子「『婦女雜誌』『民国日報・婦女評論』における沈雁冰(茅盾)の女性主義観(フェミニズム)」(1994)があるが、『婦女評論』に触れる内容が少ない。中国側では、「高琳「早期中共話語下『婦女評論』的社会主义婦女解放思想研究(1921-1923)」(2020 年 5 月) 華中師範大学修士論文」があり、『婦女評論』の社会主义婦女解放論(マルクス主義フェミニズム)にかぎって論じられている。

41) 「宣言」『婦女評論』第 1 期 1921 年 8 月

42) 漢俊「女子怎樣才能得到經濟独立」『婦女評論』第 3 期 1921 年 8 月

43) 楊ノ華「談女子職業」『婦女評論』第 65 期 1922 年 1 月

44) 徳徴「離婚雜談」『婦女評論』第 36 期 1922 年 4 月

45) 堺利彦に関する研究は前山加奈子「日中両国間の女性論の伝播と受容--『婦女評論』における堺利彦」『中国女性史研究』中国女性史研究会 (9), 1999 年 11 月 pp.9-66 の論文

に参照されたい。

- 46) 山川菊栄著鶴鳴譯「社会主義底婦女觀」(続)『婦女評論』第 11 期 1921 年 10 月
- 47) 山川菊栄著 YD (章) 譯「労働婦女底解放」『婦女評論』第 21 期 1921 年 12 月
- 48) エレン・ケイ著 YD 譯「恋愛的自由」第 58 期、第 60 期 1922 年 9 月
- 49) 田景昆、鄭曉燕編『中国近現代婦女報刊通覽』海洋出版社 1990 年 12 月 pp.47-49
- 50) 宋素紅『女性媒介：歴史与伝統』中国伝媒大学出版社 2006 年 8 月 p.159；また、「田景昆、鄭曉燕編『中国近現代婦女報刊通覽』海洋出版社 1990 年 12 月 p.99」によると、110 種以上の婦女雑誌が刊行されたことが分かるが、本稿では比較的新しいデータを引用する。
- 51) 劉人鋒『中国婦女報刊史研究』中国社会科学出版社 2012 年 5 月 p.239
- 52) 『婦声』第 2・3 期目次による作成。
- 53) 雨蒼「兒童教育是什麼」『婦女月刊』第 1 卷第 5 期 1942 年
- 54) 素貞「写時年輕的母親們」『婦女世界』第 55 期 1945 年
- 55) 戈南「兒童的道德問題」『婦女世界』第 55 期 1945 年
- 56) 蒙蒙「五四運動与婦女解放」『婦女世界』第 56 期 1945 年
- 57) 施佗「怎樣做一个新時代的婦女」『婦女世界』第 2 卷第 5 期 1941 年

History of Women's Magazines in Modern China

GU YUNXING

Graduate School of Humanities and Sciences (Doctor's degree program)

Hiroshima University

Many women's liberation movements have flourished in modern China, starting from the late Qing Dynasty through the Xinhai Revolution and the Sino–Japanese War. In those liberation movements, mass media such as newspapers and magazines played a major role, and developed as political propaganda tools and intellectuals' speech space. To explore the history of women's emancipation in modern China, it is necessary to understand the history of women's magazines of the time.

In this study, I will discuss the history of women's magazines in modern China. I will follow a chronological order, rather than limiting the discussion to a specific region, period, or magazine, to clarify the characteristics and overall picture of women's magazines in modern China (1898–1945). This article is divided into four periods: (1) the Xinhai Revolution (1898–1917), (2) the May Fourth Movement (1917–1921), (3) the period after the establishment of the Communist Party (1921–1937), and (4) the Sino–たに Japanese War (1937–1945). The study will focus on the original texts of specific women's magazines — especially women's magazines that have not been discussed in detail in previous studies—from each period.